【あ】

■噫、天予を喪ぼせり、天予を喪ぼせり

ああ、天が私を滅ぼした。天が私を滅ぼした。最愛の弟子顔回が亡くなったときの、孔子の嘆きの言葉。

◇顔淵死す。子曰く、噫、天予を喪ぼせり、天予を喪ぼせり。

顔淵死。子曰、噫、天喪予、天喪予。

○顔淵…孔子の第一の弟子、顔回のこと。「人名一覧」参照。○子曰…先生が言われた。「子」は、通常孔子を指すが、孔子以外を指す場合もある。○噫…ああ。嘆息を表す。○天…天の神。天帝。○予…「われ」と読む。「余」に同じ。○喪…破滅させる。見放す。

（先進第一一―八）

■哀矜して喜ぶこと勿かれ →如し其の情を得れば、則ち哀矜して喜ぶこと勿かれ（二五五頁）

■敢えて後れたるに非ず、馬進まざればなり

進んで殿（最後尾）を務めたわけではない。馬がどうしても進まなかったのだ。自分の手柄を誇らず、謙遜することのたとえ。

◇子曰く、孟之反は伐らず。奔りて殿たり。将に門に入らんとするや、其の馬に策うちて曰く、敢えて後れたるに非ず、馬進まざればなり、と。

子曰、孟之反不伐。奔而殿。將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也。

○孟之反…魯の大夫。「人名一覧」参照。○不伐…自分の功績を誇らない。○奔…走って逃げる。退却する。敗走する。○殿…「でんたり」または「でんす」と読む。殿。軍隊が退却するとき、その最後尾にあって追ってくる敵を防ぐこと。○将…再読文字。「まさに～せんとす」と読む。「いまにも～しそうである」と訳す。○策…「むちうつ」と読む。鞭をあてる。○非敢後也…わざわざ後れて殿を務めたわけではない。「敢」は「わざわざ」「進んで」などの意。「後」は「おくるる」と読んでもよい。

（雍也第六―一三）

■敢えて佞を為すに非ざるなり。固を疾むなり

別に世間に媚びへつらっているのではありません。

頑なになってしまうのが嫌なのです。隱者の微生畝が孔子に「どうしてそんなにあくせくするのか。世間に媚びへつらっているのではないか」と尋ねたのに対し、孔子が答えた言葉。

◇微生畝、孔子を謂いて曰く、丘何ぞ是の栖栖たる者を為すか。乃ち佞を為すこと無からんや。孔子曰く、敢えて佞を為すに非ざるなり。固を疾むなり。

微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與。無乃爲佞乎。孔子曰、非敢爲佞也。疾固也。

○微生畝…隱者。孔子より年長者と思われる。「人名一覧」参照。○丘…孔子の名。○栖栖…あちこち歩き回るさま。あくせくするさま。せかせか。○佞…口先でうまいことを言って、媚びへつらうさま。○固…頑な。頑固。○疾…憎み嫌う。

（憲問第一四―三四）

■悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らず

粗末な衣服と粗末な食事を恥じるような者とは、ともに道を語り合うことができない。道を志す者は、外面的な欲望に振り回されてはならないということ。

◇子曰く、士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らざるなり。

子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

○士…本来は卿・大夫・士の士で、中堅の役人層を指すが、ここでは道を志し、学問修養をしている者程度の意。○而…～でありながら。○悪衣悪食…粗末な着物と粗末な食事。粗衣粗食。○未足…まだ十分でない。「未」は再読文字。「いまだ～(せ)ず」と読む。否定の意を示す。○与…ともに。友人となっていっしょに。○議…「議する」と読んでもよい。語り合う。議論する。道を論ずる。○也…「なり」と読み、「～である。～なのだ」と訳す。説明して断定する意を示す。

（里仁第四―九）

■朱を奪う紫 →紫の朱を奪う（二五三頁）

■欺くこと勿かれ。而して之を犯せ

嘘をついて君主を騙すようなことはあってはいけない。そして君主に過ちがあった場合は、逆らってでも諫めよ。

◇子路、君に事えんことを問う。子曰く、欺くこと勿かれ。而して之を犯せ。

子路問事君。子曰、勿欺也。而犯之。

○子路…孔子の門人。「人名一覧」参照。○君…君主。○事…仕える。「事うること」と読んでもよい。○欺…嘘をつく。騙す。○犯…君主の機嫌をそこなっても、構わずに諫めること。「顔色を犯す」「顔を犯す」とも。○之…「君」を指す。

（憲問第一四―二三）

■欺くべきも、罔うべからざるなり

道理のあることを言って騙すことはできても、道理のないことで人の目を晦ませることはできない。宰我が「仁徳のある人は、井戸に人が落ちていると言われたら、すぐその井戸に飛び込むでしょうか」と質問したときの、孔子が答えた言葉。

◇宰我、問いて曰く、仁者は之に告げて井に仁有りと曰うと雖も、其れ之に従わんや。子曰く、何為れぞ其れ然らんや。君子は逝かしむ可きも、陥る可からざるなり。欺く可きも、罔う可からざるなり。

宰我問曰、仁者雖告之曰井有仁焉、其従之也。子曰、何為其然也。君子可逝也、不可陥也。可欺也、不可罔也。

○宰我…孔子の門人。「人名一覧」参照。○仁者…仁の道を究めた人。仁徳を備えた人。○井有仁焉…井戸に人が落ちている。ここでの「仁」は、人の意。古注では「仁徳ある人」（仁人）と解釈している。新注では「人」の字に改めるべきだと言っている。○雖…仮に～しても。仮定形。○従…落ちた人を井戸に飛び込んで救う。○何為其然也…どうしてそのようなことができようや。「何為」は「なんすれぞ」と読み、「どうして」「なぜ」「何のために」と訳す。「其」は、語調を整える助字。意味はない。○逝…行く。使役動詞。ここでは「ゆかしむ」と読む。○陥…井戸の中へ入らせる。○欺…道理のあることを言って相手を騙すこと。○罔…道理のないことで相手の目を晦ませ、騙すこと。

（雍也第六―二四）

■朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり

朝に道を聞くことができれば、その日の夕方に死んでも後悔しない。真理を求める尊さをいう。

◇子曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。

子曰、朝聞道、夕死可矣。

○朝…「あした」と読む。時間の短いことを示す。○夕…「ゆうべ」と読む。「朝」同様、時間の短いことを示す。○道…人間としての正しい生き方。人の道。仁の道。○可…よろしい。悔いることはない。

（里仁第四―八）

■遊ぶに必ず方有り

父母の存命中に遠方へ出かけるときは、父母に心配をかけないよう、行き先をはっきり伝えておくべきである。親孝行の心がけの一つ。

◇子曰く、父母在せば、遠く遊ばず。遊ぶに必ず方有り。

子曰、父母在、不遠遊。遊必有方。

○在…存命中。「いますときは」と読んでもよい。○遠遊…遠出。遠方への旅行。○方…「つね」と読んでもよい。方角。一定の方向。父母に行き先をはっきり伝えておくこと。

（里仁第四―一九）

■迹を践まず。亦た室に入らず

（善人は）過去の聖人の歩んだ道を学習しないので、聖人の道の奥義には達しない。

◇子張、善人の道を問う。子曰く、迹を践まず。亦た室に入らず。

子張問善人之道。子曰、不践迹。亦不入於室。

○子張…孔子の門人。「人名一覧」参照。○善人…善良な人。いい人。○践迹…過去の聖人の歩んだ道をそのまま真似る。先人のやり方に従う。古人のやり方を学習する。○不入於室…聖人の道の深い境地に達しない。

（先進第一一―一九）

■訐きて以て直と為す者を悪む

人の秘密を暴き立て、それが正直だと思っている者を憎む。

◇子貢曰く、君子も亦た悪むこと有るか。子曰く、悪むこと有り。人の悪を称する者を悪む。下流に居て上を訕る者を悪む。勇にして礼無き者を悪む。果敢にして窒がる者を悪む。曰く、賜や亦た悪むこと有るか。徼めて以て知と為す者を悪む。不孫にして以て勇と為す者を悪む。訐きて以て直と為す者を悪む。

子貢曰、君子亦有惡乎。子曰、有惡。惡称人之惡者。惡居下流而訕上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。曰、賜也亦有惡乎。惡徼以爲知者。惡不孫以爲勇者。惡訐以爲直者。

○子貢…孔子の門人。「人名一覧」参照。○君子…ここでは、「先生(孔子)のような君子」の意。○悪…憎む。憎悪する。○称…言い触らす。○下流…下位。低い地位。下役。○上…目上の人。上役。○訕…謗る。悪口を言う。○勇而無礼者…勇気はあるが礼儀をわきまえない者。○果敢而窒者…決断力はあるが、道理に通じない者。「果敢」は、思い切って実行すること。決断力のあること。「窒」は、道理に通じないこと。筋が通らないこと。○賜…子貢の名。○徼…古注では「徼めて」と読み、「かすめ取る。ぱくる」と訳す。新注では「徼いて」と読み、「様子を伺い探る」と訳す。○不孫…「不遜」に同じ。思い上がった態度で振る舞う。生意気。傲慢無礼。○訐…人の秘密や悪事を暴き立てる。暴露する。

(陽貨第一七―二四)

■危うきを見ては命を致す

国家の危難に際して、生命を抛って忠義を尽くす。

◇子張曰く、士は危うきを見ては命を致し、得るを見ては義を思い、祭には敬を思い、喪には哀を思う。其れ可なるのみ。

子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀。其可已矣。

○子張…孔子の門人。「人名一覧」参照。○士…ここでは教養のある立派な官吏。周代の官吏は、卿・大夫・士の階級になっていた。○危…危険。危難。危急。○致命…命のある限り尽くす。一生懸命に尽くすこと。○見得…利得に直面しては。○思義…道理に合ったものかどうか。正当なものかどうか。○祭…祭祀。○思敬…敬虔な心を忘れない。○喪…葬儀。喪礼。○思哀…哀悼の気持ちを忘れない。○其可已矣…それだけでよろしかろう。それでこそ士と言えよう。

(子張第一九―一)

■危うきを見ては命を授く →利を見ては義を思い、危うきを見ては命を授く(二六九頁)

■危うくして持せず、顚えりて扶けずんば、則ち将た焉くんぞ彼の相を用いん

臣下が主君の過ちを諫めないのは、盲人の足元が危ないときに支えようともせず、転倒しても助け起こそ

うとしないようなもので、補佐役などいらないではないか。

◇危うくして持せず、顛えりて扶けずんば、則ち将た焉くんぞ彼の相を用いん。且つ爾の言過てり。虎兕柙より出で、亀玉、櫝中に毀れなば、是れ誰の過ちぞ。

危而不持、顛而不扶、則將焉用彼相矣。且爾言過矣。虎兕出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過與。

○危而不持…足元が危ないときに支えようとしない。○顛而不扶…転倒しても助け起こそうとしない。○相…補佐役。○虎兕…虎と野牛。○柙…檻。○亀玉…亀の甲と玉。貴重品のたとえ。○櫝…箱。

（季氏第一六―一）

■過ちて改めざる、是れを過ちという

過ちを犯したことを知っていながらも改めようとしない、これを本当の過ちという。

◇子曰く、過ちて改めざる、是れを過ちと謂う。

子曰、過而不改、是謂過矣。

○過…過失をする。動詞。次の「是謂過矣」の「過」は名詞。過失。過ち。○不改…過失を改めない。○是…「～これ…」と読み、前文を受けて「～はつまり…だ」と訳す。

（衛霊公第一五―二九）

■過ちては改むるに憚ること勿かれ

過ちを犯したら、躊躇しないですぐさま改めよ。

◇子曰く、君子は重からざれば則ち威あらず。学べば則ち固ならず。忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること無かれ。過ちては則ち改むるに憚ること勿かれ。

子曰、君子不重則不威。學則不固。主忠信、無友不如己者。過則勿憚改。

○重…重々しい。○威…威厳。○学…学問をする。○固…固陋。頑固。頑な。○忠信…真心を尽くし、偽りのないこと。忠実と信義。○不如己者…自分より劣った人。「不如」は「～にしかず」と読み、「～に及ばない」と訳す。○無友…友だちにするな。○過…過ち。過失。「あやまてば」と読んでもよい。○憚…躊躇する。○勿…「なかれ」と読み、「～するな」と訳す。禁止の辞。

（学而第一―八）

■過ちを文る →小人の過つや必ず文る（一四四頁）

■過ちを弐びせず

（顔回は）同じ過ちを二度と繰り返すことはありませんでした。

◇哀公問う、弟子、孰か学を好むと為す。孔子対えて曰く、顔回なる者有り、学を好む。怒りを遷さず、過ちを弐びせず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ学を好む者を聞かざるなり。

哀公問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回者、好學。不遷怒、不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。

○哀公…魯の君主。「人名一覧」参照。○弟子…「ていし」と読む。弟子。門弟。○孰為好学…「孰か学を好むと為す」と読む。「為す」は「みなす、思う」の意。「誰を学問好きと思いますか」と訳す。○対曰…目上の人に答えるときに用いる。○顔回…孔子の門人。「人名一覧」参照。○有顔回者…「顔回なる者有り」と読む。「有～者」は、「～なるものあり」と読み、「～という人がいて」と訳す。○不遷怒…怒りにまかせて、八つ当たりしない。○不弐過…「過ちを弐びせず」と読む。同じ過ちを繰り返さない。○不幸短命死矣…「不幸短命にして死せり」と読む。「不幸にも短命で死んでしまいました」と訳す。「矣」は、文末につけて断定を表す。訓読しない。○今也則亡…「今や則ち亡し」と読み、「今はもうこの世におりません」と訳す。「也」は「や」と読み、「～は」と訳す。○未聞…まだ聞いたことがない。「未」は再読文字。「いまだ～(せ)ず」と読み、「まだ～しない」と訳す。

（雍也第六―二）

■過ちを観て斯に仁を知る

過失を観察することによって、その人の仁のほどが分かる。人の過失には類型があり、それを見れば、その人が仁であるか不仁であるかが分かるということ。

◇子曰く、人の過ちや、各〻其の党に於いてす。過ちを観て斯に仁を知る。

子曰、人之過也、各於其黨。觀過斯知仁矣。

○人之過也…人が過失を犯すのは。「過」は、「あやまち」と読む。過失のこと。「あやまつ」と動詞に読んでもよい。「也」は、「や」と読み、上の語を強調する意を示す。○於…「おいてす」と動詞に読む。○党…類い。類型。カテゴリー。○観過…過失を観察する。○斯…「ここに」と読むが「則ち」と同じ意。

■有れども無きが若く、実つれども虚しきが若く、犯さるるも校せず

（里仁第四―七）

才能があってもまるでないように、学識が充実しているのにまるで空虚なように、人から理不尽なことをしかけられても仕返しをしたりなどしない。曾子が顔回を評した言葉。

◎原文・語釈は「能を以て不能に問い、多きを以て寡なきに問う」（二一三頁）を参照。

（泰伯第八―五）

■晏平仲は善く人と交わる。久しくして之を敬す→久しくして之を敬す（二一七頁）

【い】

■威ありて猛からず

威厳はあるが荒々しくない。「五つの美徳」の一つ。

◎原文・語釈は「五美を尊び、四悪を屏く」（二一五頁）を参照。

（堯日第二〇―二）

■言うこと能わざる者に似たり

（孔子は郷里ではおとなしくて）まるで口が利けない人のようであった。

◎原文・語釈は「其の宗廟・朝廷に在るや、便便として言う。唯だ謹めるのみ」（一七二頁）を参照。

（郷党第一〇―一）

■言えば必ず中る有り→夫の人言わず、言えば必ず中る有り（五〇頁）

■桴に乗りて海に浮かばん→道行われず、桴に乗りて海に浮かばん（二四九頁）

■忿りには難を思う

腹が立ったときは、後から起こる面倒なことを思う。「難」は、後から起こる災難。後難。君子に九つの思うべきことがあり、その中の一つ。